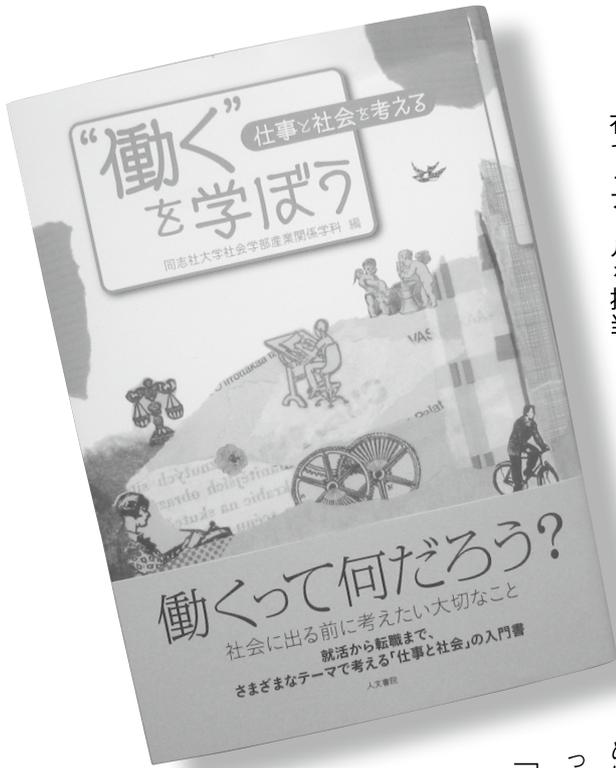


ブック

NOTICE OF BOOK

紹介

同志社大学社会学部産業関係学科〔編〕
人文書院(2011年3月31日発行) ● 1500円
“働く”を学ぼう～仕事と社会を考える～



本書を編纂した同志社大学社会学部産業関係学科とは、実は、我々IMFJCとは縁が深い。1969年12月にIMFJCがスタートして、早42年が経過した。同志社大学神学部教授の竹中正夫初代校長が、パートナーとして選んだのが、90歳を過ぎられた今も運営委員長として矍鑠と講義をされている中條毅先生だ。中條先生が同志社大学の産業関係学科の生みの親と言っている。中條先生の後継として、石田光男先生、香川孝三先生、中田喜文先生、富田安信先生には労働リーダーシップコースの運営委員として、現在ゼミナールを担当

いただいている。そういう意味で雇用関係・労使関係を中心課題として研究・教育されている同志社大学社会学部産業関係学科が本書を編纂されたことは非常に意義深いものを感じる。

本書の狙いについて、「働く」ことの意義を示し、雇用関係・労使関係を中心課題として展開されてきた産業関係学の視点から、「働く」ことをめぐるルールと、働き方をめぐる考え方、学び方を提案（はじめに）と記されている。

本書は7章で構成され、各章を同学科の講師陣が執筆している。すなわち、第1章「就活で燃え尽きないために」、第2章「非正社員にとって優しくない国」、第3章

「女性が活躍する職場づくりとは」、第4章「資格って何だろう」、第5章「働く」に関わる法的ルール」、第6章「賃金制度は企業社会を観察する鏡」、第7章「より良い転職を行うためには」から成っている。ちなみに、

第3章は富田安信先生が担当している。

巻末の座談会「産業関係学を語る」では、労働リーダーシップコースで「統計学」を担当されている浦坂純子准教授の司会で、石田光男先生も出席されている。その中で、印象に残った言葉は、「これから世の中に出ていく人たちは、世の中で言われていることをきちんと自分で確認する力を持たないといけない。いろいろ調べてわからなければそこへ行って真実かどうか確かめる。そうしなければ大局を見失います。そうしなければ確信が持たないので自分の言葉も表面的になる。そうでは駄目なのだ」と学ぶのが産業関係学の研究です。

働くこと、仕事をするとは、人間の一生において重要な部分を占める。今、日本において、安心して働ける仕事が減りつつある。大学を卒業しても、安定した仕事に就けない場合も出て来ている中で、改めて、「働く」ことの意味を徹底検証して、全ての人たちが安心して働ける仕組みについても提案している本書は、学生だけでなく、労働組合・経営リーダーにとっても必読の書と言える。(美)